

令和 5 年 10 月 27 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00033

研究課題名(和文) デザインとの協同による共創哲学の理論と実践

研究課題名(英文) Inclusive Philosophy: A Theory and Practice created through Collaboration with Designers

研究代表者

梶谷 真司 (Kajitani, Shinji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50365920

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、私が2016年から始めた「哲学×デザイン」プロジェクトから構想したものである。「共創哲学」とは、哲学対話を「思考を共に創り出す営み」としてより一般化して展開する試みである。それは、プロダクトよりも作るプロセスのデザインをする inclusive design から着想を得ている。本プロジェクトでは、このような広い意味でのデザインを行っている人たちと協働してきた。成果としてとりわけ重要なのは、共創にとっての場のデザインの意義、および、共通点や類似点ではなく、相違点や異質性に基づく新たなコミュニティの可能性である。この二つは、今後様々な意味でのインクルージョンを展開する基礎となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日、Diversity(多様性)とInclusion(包摂)が広く社会における課題とされ、多くの場合、相互の理解と配慮のような原理や理想は唱えられるが、それがいったいどのような状態なのか、どのようにすればそこに近づけるのかほとんど問われていない。その結果、形式的に制度ができ、無闇に努力が求められるだけで、事態が改善されず、苛立ちとあきらめが広がっていく。しかし哲学対話から着想した共創哲学(Inclusive Philosophy)は、デザインと協働することで、場のデザインの重要性に着目し、まさにその原則や理念を現実に結びつける可能性を開く。

研究成果の概要(英文)：This research was conceived from the "Philosophy x Design" project that I started in 2016. "Inclusive Philosophy" is an attempt to generalize and develop philosophy dialogue as "an activity of creating thoughts together. It is inspired by the concept of "inclusive design," in which the process is designed rather than the product. In this project, we have collaborated with people who are engaged in design in this broad sense. The most important outcomes are (1) the significance of "design of place" for inclusion and (2) the possibility of a new community based on differences and heterogeneity rather than commonalities and similarities. These two will serve as the basis for developing inclusion in various forms in the future.

研究分野：Philosophy

キーワード：共創哲学 デザイン inclusive philosophy 哲学プラクティス design community

1. 研究開始当初の背景

哲学対話とは、様々な人が問いを共有し、共に考える営みである。それに私が初めて出会ったのは、2012年にハワイの小学校と中学校で「子どものための哲学(Philosophy for Children:P4C)」を見学した時であった。そこでは哲学の難解な思想を理解したり、そのための知識を身につけたりするのではなく、対話を通して考える力を育てていた。子どもたちは、難しそうに顔をしかめるのではなく、楽しそうに嬉々として話しながら、しかし真剣に考えていた。それは私にとって新しいタイプの哲学との出会いであった。しかもこの対話型の哲学は、子どもだけではなく、大人にとっても、誰にとっても楽しいはずだという直観があり、「みんなのための哲学(Philosophy for Everyone)」なるものを構想することになった。その後3年間、私は様々なテーマ(それも母、お金、アニメ、恋などおよそ哲学らしくらぬテーマ)で哲学対話のイベントを行い、関心をもった人たちからの求めに応じて、学校や会社、地域コミュニティなど様々な場所で対話の実践を重ねてきた。

そうする中で私が着目したのは、思考力の育成というよりも、「共に考える」=「思考を共に創り出す」ことを通して、多様な人が一緒にいられるインクルーシブな場が生まれることであった。そこでは、何を考えるかという結果よりも、どのように考えるかという過程が重要である。その点でプロダクトよりもプロセスを重視するインクルーシブデザインとの共通点が多いことに気づいた。そのような経緯で2016年から、哲学とデザインが交差するところでプロジェクトを立ち上げ、多様な人と協同する場を作っている広い意味でのデザイナーと協同するようになった。本研究課題を申請するにあたって、哲学対話を「共創哲学」としてより一般化するという目標を掲げ、それをデザインに倣って inclusive philosophy と呼んだのは、このような背景からであった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、インクルーシブな場がどのようにして成り立つのか、そのための条件と方法は何か、そこで「哲学」=考えることはどのような意義や役割をもちうるのかを明らかにすることである。それは同時に、デザインから触発される形で新たな哲学を生み出すことでもあり、哲学を通してデザインにも新しい次元を加えることでもある。つまり「デザインの哲学」と同時に「哲学のデザイン」を目指すものであった。さらに言えば、インクルージョンというのは、昨今では多様性と共生のために盛んに言われるようになり、今後様々な場面で求められることでもある。本研究は、哲学を通してそのような社会課題に応答することも視野に入れている。

3. 研究の方法

哲学とデザインの違いを簡潔に言うなら、哲学は「言葉」と関わり、デザインは「物」と関わるということである。ここで言う「物」には、いわゆる形のある事物だけでなく、人も含まれ、空間や時間、人間を取り巻く様々な関係性も含まれる。デザインの強みは、構想したこと(思考)を具現化し、現実を直接変える力をもっていること、言語化が難しいもしくはできないことでも具体的に形を与えられることである。哲学はその点、言語的には精緻なものを生み出せても、それを現実に形あるものにはしない。他方で、デザインは、感性に頼るところが多く、言語的な表現が必ずしも得意ではないが、概念的な彫琢をすることでコンセプトを明確にし、より良いデザインをすることもできる。したがって研究を進めるうえでは、デザインの着想や手法を哲学に取り入れるだけでなく、哲学の概念や方法をデザインに生かすことが重要である。

「共創哲学」は、課題名のとおり、哲学とデザインの協同によって展開する。そのために実際にデザインを専門としているかどうかにかかわらず、何らかの意味でインクルージョンに取り組んでいる広い意味での“デザイナー”と共に活動し、意見交換を繰り返すことで、理論と実践の両方面から研究を行った。そのなかには職業的なデザイナーもいれば、音楽家、映画監督、起業家、ゲームクリエイター、社会福祉士、自治体職員、医療関係者、ジャーナリスト、教育や地域おこしやマイノリティー支援のNPOの人、子育て中の母親など、実に多様な人たちがいる。その人自身が何らかの生きづらさを抱えている人たちとも協同した。人文学である以上、文献による研究は欠かせないが、この新たな哲学の開拓には、それ以上にこうした実践家との協同と、そこから理論化への努力をすることが何より重要であった。その点でこの研究は、新たな哲学の方法を模索する試みでもあった。

4. 研究成果

理論的な面での成果としては、おもに次の2つが挙げられる。

1) 新たな知識論

知識をそれが存在する場所と、それをもつ主体との関連でより多角的に分析することで、多様なもののインクルージョンの可能性について深く考察をすることができた。これは私がこの研究とは別に以前から知識と主体と場所の関係について考えてきたことを図らずも発展させることにつながった。すなわち、知識はつねにそれが生まれ使われる場と人から切り離すことができず、そこにおいては一般論としてどのような知識が必要か、どのような知識が獲得できるかといったことはあまり意味をもたない。各自が知ること、理解すること、考えることが、多様な物や人と共にあることで初めて成立しうることが明らかになった。

2) 新たな共同体論

哲学対話の場をコミュニティの一種として捉えることで、従来とは異なる共同体論を構築することができた。すなわち、通常の類似性や共通点を土台とするコミュニティではなく、異質性や相違点を土台とするコミュニティの可能性が哲学対話によって可能になることを提示できた。さらに哲学対話は、たんに共同性だけではなく、単独性も同時に成立させること、言い換えれば、共にいることで一人になりうる場であることが明確になった。この点は上の知識論とも関連することで、知識がそれ自体においてではなく、その時々共同性に根差すものであるという洞察にもつながる。

このような知識論と共同体論から、対話的であるとはどういうことか、それが共創的な場の形成にどのように関わることかについて様々な示唆を得ることができた。そのことはとりわけ実践的な面での成果として示すことができる。

インクルーシブな場の形成にとって重要なのは以下のような条件である。

- ・一緒にすることが大まかに決まっている(一つのプロダクトを創る / 一つのテーマ、問いについて対話する)
- ・役割が明確に決まっていない(制作者と利用者を区別せず、利用者が生産にも関わる / 考え・話す人と聞く人を分けず、一緒に考え話し聞く)
- ・それぞれの仕方に関わる(それぞれがその時々でできることをする / それぞれが話したいことを話し、考えたいことを考える)
- ・参加資格や達成目標をゆるやかにしておく(「こうじゃなきゃいけない」「これはダメ」「これが正しい」と考えない。そのつど出てきたものに合わせて進めていく)

要するに物との関わりにおいても人どうし関係においても、「適切な曖昧さ」とでも言うべきことが重要なのである。物事を厳密に決めて(ルールや制度など)それを厳格に適用したり守ったりすることによっては、インクルーシブな場は生まれにくい。

こうしたことは、哲学ではたんなる“ノウハウ”や“コツ”として軽く見られ、一般にもあまり注意が向けられない。コミュニティや共生のために相互の理解や尊重、寛容さが重要だと言われるが、そう唱えればそのとおりになると思っているか、さもなければあとは個々人の意識と努力に任せ、結局うまくいかないことを嘆くだけになる。いずれにせよ、それ以上何もできることはないかのように考えている。

しかし個人の意識にせよ努力にせよ、無条件にゼロから発動するわけではない。そこにはそういうことが起こりやすい条件、環境がある。またそれ以前に、「理解する」とか「尊重する」ということがどういうことなのか、寛容さとはどのような状態なのか、実はよく分かっていないことが多い。ましてどのようにすればそれが可能なのかは、さらに分からない。その点、哲学対話ではそのような状態が実現しやすく、またそのためにどうすればいいかも明らかになり、デザインと協同することで、それを実践面の成果として、より広いコンテキストである程度明らかにすることができた。ただし、まだ概念的な説明は不十分であろう。これは言うなれば、理論と実践、理念と現実をどのようにして架橋するのかという問題であり、今後それを探究していくのが今後の共創哲学(inclusive philosophy)の重要な課題である。

付記

コロナウィルスの影響により、プロジェクトが2年延長されたこと、その間オンラインによって哲学対話を行う人が劇的に増えたことは大きな恩恵であった。私自身、以前と比べて哲学対話を自ら主催し、他の人の対話にも頻繁に参加した。そこで多くの人々が自分たちのテーマで対話を行い、その場に応じて柔軟にアレンジをしていく様を見ることができた。そこにはオンラインだからこそ可能なインクルージョンの形があった。とりわけ地理的な制約を受けないため、国内外を問わず色々なところから参加できるようになった。またパソコンの画面によって隔てられていること、カメラやマイクをオフにできることで、通常であれば外出が難しい人も、それぞれにふさわしい形で参加していた。こうしたオンラインによってもたらされた状況が参加者の多様性を著しく広げた。少なくとも私にとってコロナ禍は、ネガティブに働いたことはなく、むしろ類まれな状況の中で多くのポジティブな成果をもたらしてくれた。このような機会をくださった学術振興会、この間に協働してくださったすべての人たちに深謝したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Shinji KAJITANI	4. 巻 -
2. 論文標題 Think Together, Be Together -- Inclusive Philosophy and the New Principle of Community	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Psyche y Techne: Sospechas sobre una Relacion Intrincada	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶谷真司	4. 巻 36
2. 論文標題 共に考えることと共にいること 哲学対話による新たなコミュニティの可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『実存思想論集XXXVI 哲学対話と実存』	6. 最初と最後の頁 7 - 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶谷真司	4. 巻 73
2. 論文標題 探求学習と哲学対話 高校への導入の意義と問題点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 数研AGORA	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶谷真司	4. 巻 Issue 3
2. 論文標題 アート×哲学対話 がひらく共生の新たな可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 TURN JOURNAL Spring 2020	6. 最初と最後の頁 28 - 29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計59件（うち招待講演 59件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第1回哲学講座「オンライン哲学対話 人はなぜ自由を求めるのか」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第2回哲学講座「オンライン哲学対話 人は生きているだけで価値はあるのか」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第3回哲学講座「なぜ世代間で特徴が異なるのか」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 「悩む」を「考える」にする～哲学対話から見える新しい占いの形
3. 学会等名 （株）ザッパラス主催占いアカデミー占い夏期講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第4回哲学講座「哲学は何の役に立つのか」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 一緒にいるとはどういうことか？～共創哲学の試み
3. 学会等名 服部国際奨学財団（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第5回哲学講座「オンライン哲学対話 正月はめでたいか、めでたくないか」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 NINGENフェスティバル「差異にもとづくコミュニティ～哲学対話で起きていること」
3. 学会等名 一般社団法人大牟田未来共創センター（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 幻冬舎大学・大人のためのカルチャー講座「なぜ対話はすれ違うのか～哲学対話を体験してみませんか」
3. 学会等名 幻冬舎・エコツェリア協会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第6回哲学講座「心を持つとはどういうことか」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 哲学対話とは何か？
3. 学会等名 長野上水内教育会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 考えるとはどういうことか
3. 学会等名 公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団三鷹市生涯学習センター（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 「オンライン哲学対話 日本・ドイツ生活文化の未来 第2回 日独の「住まい」を哲学する～Anne & Sebastian Gross氏との対談」
3. 学会等名 ゲーテ・インスティテュート東京（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第1回哲学講座「オンライン哲学対話 人生の目的とは何か」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第2回哲学講座「オンラインレクチャー＆哲学対話 宗教とは何か」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第3回哲学講座「オンライン哲学対話 記憶」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 哲学対話ワークショップ 問う・考える・語る・聞くを知る
3. 学会等名 公益財団法人豊橋文化振興財団 穂の国とよはし芸術劇場 PLAT (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第4回哲学講座「オンライン哲学対話 コロナ禍のなか思うこと」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第5回哲学講座「オンライン哲学対話 お金で幸せは買えるのか」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第6回哲学講座「オンラインレクチャー & 哲学対話 葬式とは何か」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 考えることと哲学対話（前4回：第1回「考える力はなぜ必要か？」（7月5日）、第2回「新しい哲学の潮流」（7月12日）、第3回「哲学対話とは何か？」（7月19日）、第4回「哲学対話の実践の現場」）
3. 学会等名 NHKカルチャーラジオ（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 てつがくって何？～一人で楽しみ、仲間とつながり、競い合う
3. 学会等名 アルパ・エデュ オンラインおうち学校（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 オンラインで哲学対話
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 紫原明子×梶谷真司 “ 誰とも同じではない私が、誰とも同じでない私のままでいることを許されるために ”
3. 学会等名 もぐら会（代表：紫原明子）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 哲学からみたコミュニティとデザインの未来
3. 学会等名 IWキャンパス（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 なぜ私たちは死について語るのか
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 思考の自由と排除なき共同性 哲学対話による新たなコミュニティの可能性
3. 学会等名 実存思想協会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 アニメ「つみきのいえ」鑑賞&哲学対話
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 恋だの愛だの
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 AIと人間
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 死をめぐる哲学対話
3. 学会等名 NHKカルチャー青山教室（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第1回哲学講座「対話としての哲学（1）～蓮如の言葉から」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 哲学対話ワークショップ「問う・考える・語る・聞く」を知る
3. 学会等名 公益財団法人豊橋文化振興財団 穂の国とよはし芸術劇場PLAT（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 対話によるコミュニティのつくり方
3. 学会等名 第6回町田市生涯学習センター交流会「町田でカフェだよ！全員集合」，町田市生涯学習センター（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第2階哲学講座「対話としての哲学（2）～哲学の言葉から」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 哲学対話の可能性～教育からコミュニティづくりまで
3. 学会等名 カルチュラルクリエイティブス東京 於 首相公邸（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第3回哲学講座「なぜ私たちは死について語るのか？」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 哲学対話セミナー「五ヶ瀬の未来を共に語りませんか？」
3. 学会等名 五ヶ瀬町役場（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 死をめぐる哲学対話
3. 学会等名 NHKカルチャー青山教室（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第4回哲学講座「美術館de哲学cafe」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 於 碧南市藤井達吉現代美術館（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 「考える」大切さは学べるのか～中高生が哲学する意味と公共劇場の役割
3. 学会等名 ロームシアター京都・劇場の学校プロジェクト・舞台芸術の未来を担う人々のための研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 SDGs対話～新たなコラボレーションを求めて
3. 学会等名 公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 哲学対話の可能性～教育からコミュニティづくりまで
3. 学会等名 公益財団法人モラロジー研究所（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第5回哲学講座「人參をめぐる哲学対話」
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 世界農業遺産・ユネスコエコパーク中学生サミット・哲学対話ワークショップ
3. 学会等名 宮崎県 / 世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域活性化協議会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 対話型哲学の可能性～教育から地域づくりまで
3. 学会等名 SDGs企業戦略フォーラム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 考える力を育てる哲学対話
3. 学会等名 NHK「視点・論点」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 対話型哲学の可能性 教育からコミュニティづくりまで
3. 学会等名 第753回 浅草寺仏教文化講座，於 丸の内マイプラザ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 対話としての哲学(1)～新しい哲学運動とその可能性
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 哲学講座, 於 碧南市哲学たいけん村無我苑 瞑想回廊(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 対話としての哲学(2)～哲学を“体験”するワークショップ
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 哲学講座, 於 碧南市哲学たいけん村無我苑 瞑想回廊(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 第3回 哲学対話 in グレイトヴォヤージュ
3. 学会等名 大学受験予備校グレイトヴォヤージュ, 於 グレイトヴォヤージュ本館(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 対話型哲学の可能性～教育から地域づくりまで
3. 学会等名 取手市役所, 於 取手ウェルネスプラザ多目的ホール(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 対話型哲学の可能性～教育からコミュニティづくりまで
3. 学会等名 京都フォーラム，於 大阪駅前第3ビル（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 Design as Theory and Practice for Social Inclusion
3. 学会等名 第二十届文化研究年會暨國際研討會，於 台湾国立交通大学（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 誰でもできる対話の場の作り方 哲学対話によるファシリテーション
3. 学会等名 NHKカルチャー青山教室（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 愛の哲学対話 ～
3. 学会等名 NHKカルチャー青山教室（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 「江戸の育児書の間観(1)～子どもはいつ“宝”となったのか
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 哲学講座, 於 碧南市哲学たいけん村無我苑 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 梶谷真司
2. 発表標題 江戸の育児書の間観(2)～母乳育児はどういう意味で“自然”なのか
3. 学会等名 碧南市哲学たいけん村無我苑 哲学講座, 於 碧南市哲学たいけん村無我苑 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinji Kajitani
2. 発表標題 The Ethos and Nomos of Inclusion: A Philosophical Reflection on Why and How We Live with Diversity
3. 学会等名 Summer School Globalization and Diversity 2018, Georg-August-Universitaet Goettingen, Germany (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 梶谷真司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 飛鳥新社	5. 総ページ数 240
3. 書名 『書くとはどういうことか 人生を変える文章教室』	

1. 著者名 梶谷真司	4. 発行年 2022年
2. 出版社 教育開発研究所	5. 総ページ数 296
3. 書名 「学校で『考える』ことを教える」ことを考える」, 『2030年の学校をつくるスクールリーダーへ 価値観を揺さぶる22人の識者からのメッセージ』, 『教職研修』編集部編, 244 - 255頁。(インタビュー記事)	

1. 著者名 梶谷真司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教育開発研究所	5. 総ページ数 214
3. 書名 『ポスト・コロナの学校を描く～子どもも教職員も楽しく豊かに学べる場をめざして』(『教職研修』編集)に所収の「生徒も教員も楽しい授業へ 哲学対話から得られる主体的学びのヒント」(127 - 138頁)	

1. 著者名 梶谷真司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 『ゼロからはじめる哲学対話：哲学プラクティスハンドブック』(河野哲也編・得居千照・永井玲衣編集協力)に所収の「地域の問題に深い解決をもたらす」(72 - 80頁)	

1. 著者名 梶谷真司	4. 発行年 2019年
2. 出版社 白水社	5. 総ページ数 216
3. 書名 『ことばを紡ぐための哲学 東大駒場・現代思想講義』「話す・聞く」	

1. 著者名 梶谷真司	4. 発行年 2018年
2. 出版社 幻冬舎	5. 総ページ数 262
3. 書名 『考えるとはどういうことか 0歳から100歳までの哲学入門』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------